

## 第3章 計画の目標と方針

## 第1節 目標

### 水と緑に育まれた、多様な江戸川らしさを 引き出す景観まちづくり

～わがまちへの誇りを持つ暮らし～

本区は、三方を水域で囲まれた平坦な地形と、区の大半が住宅地という特性を持っています。そこには、かつて農村や漁村として培われてきた文化や、塩の道や房総から江戸の入口として人々が行き交っていた歴史、土地区画整理事業により新しく生まれたまちなみ、区民と区が協働で育ててきた水と緑豊かな環境など、まちの変遷とともに人々の生活の中で作りあげてきた様々な歴史や文化が、それぞれのまちの「江戸川らしさ」となっています。

また、景観はまちの「住みよさ」を判断するバロメーターでもあります。路地のにじみだす生活感、商店街にあふれる買い物客の活気、住宅地の緑豊かで閑静な佇まい、親水公園で遊ぶ子ども達のにぎわいなど、まちの住みよさのイメージは、そこに住んでいる人々の暮らしや生き方が「景観」として姿形に表れています。

まちの基盤が整備された現在、安全・安心や利便性だけでなく、わがまちへ誇りを持って暮らせることが重要になってきています。そのためには、そこに住む一人ひとりが、まちの中に埋もれて見えにくくなってしまった「江戸川らしさ」を発見し、それを大切に守り育てていくことが大切です。

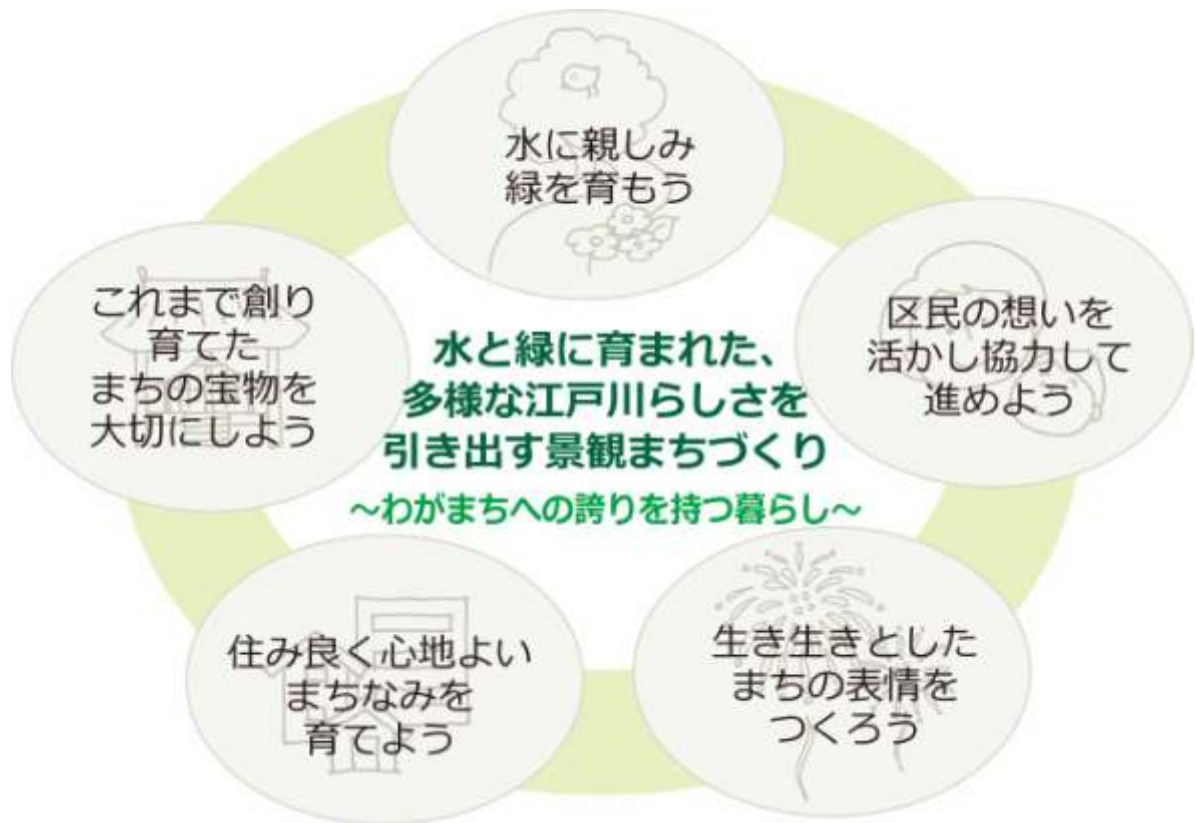
このような景観まちづくりの取り組みを継続することによって、生活環境の向上や、地域の活性化が進み、次世代へ文化資源を伝承していくことにつながります。

以上をふまえ、本計画では、多様な「江戸川らしさ」を引き出すことにより、本区で暮らす一人ひとりがわがまちへの誇りを持ち、いつまでも住み続けたいと思える景観まちづくりを目指します。

## 第2節 基本方針

目標を実現するため、第2章でまとめた本区の景観を構成する主要要素である「水と緑」、「歴史・文化」、「まちなみ」、「活力・にぎわい」、「暮らしと活動」の視点に基づいて5つの基本方針を設定しました。

景観は、これらの要素が複合的に重なり合って形成されるため、これらの視点を組合せるとともに、都市や建築等のまちづくりの分野だけでなく、教育など様々な分野から多面的に景観まちづくりに取り組みます。





## 1. 水に親しみ、緑を育もう

### —海と河川、親水施設を核とした、水と緑の景観を拡充する—

本区は、三方を海と河川で囲まれた水と緑豊かな都市です。

多様な水辺は、かつては水運や農業用水として生活に欠かせないものでした。

しかし、一方で洪水や高潮などの水害を度々引き起こすおそろしいものでもありました。さらに、高度経済成長と共に、生活排水による水質汚濁など、環境が悪化した時代もありました。

このような環境を改善し、安心して暮らせるよう、放水路の開削や堤防工事、下水道整備など様々な水害からまちを守る取り組みを積極的に進めてきました。さらに、かつての子どもの水遊び場としての環境を取り戻そうと、全国に先駆けて古川親水公園をはじめとする「親水」をキーワードとした多数の水辺をつくってきました。

また、水辺だけでなく、「豊かな心 地にみどり」を合言葉に、都市整備にあわせて公園や街路樹など積極的に緑化を進め、23区で最も広い公園面積、最も多い樹木の本数を持つなど、より緑豊かな環境が形成されました。

さらに、小岩菖蒲園や小松川千本桜をはじめとした数多くの花の名所、かつて大杉で始まったといわれ現在も地域産業となっている花卉園芸、小岩フラワーロードや駅前花壇などにおけるボランティアによる草花の手入れ活動、花の祭典、小岩あさがお市などのイベントなど、花のまちづくりが盛んに行われています。

これらの豊かな水と緑の環境は、人々の憩いの場となるだけでなく、ヒートアイランド現象を緩和する風の道を形成するとともに、海水・汽水・淡水域それぞれの水域における多様な生き物の生息地となっています。

これまでの取り組みにより、以前より作り育ててきた水と緑の環境は、時代が経った現在、私たちの暮らしの中に欠かせない身近な自然として、本区の住みやすさ、子育てのしやすさを象徴する環境となっています。今後もこれらの環境を後世に伝えていくため、より多くの区民が水に親しみ、緑を育むことを通じ、海、河川、親水施設を核とした、水と緑の景観をさらに拡充していきます。



### ●視点-1 水と緑を守り、育てる

東京湾を望む臨海部や、荒川・中川、江戸川、旧江戸川、新中川の大河川、都立公園や総合レクリエーション公園などの大規模公園は、空が開ける都市の貴重なオープンスペースとなっており、風の道の主動脈として、本区のヒートアイランド緩和に寄与しています。また、光輝く水面を渡る鳥たちの姿、身近な生き物とのふれあいなど、干潟や芦原、樹林などは多くの生き物たちのすみかとなっています。このような空・水・緑・生き物などの自然に囲まれた景観が、気軽に行ける場所にあるのは本区の大きな特色です。

また、身近に楽しめる水辺、手入れがされた生垣の並ぶ美しい道、アイストップとなる場所にある大木、路地に並ぶ色々な草花のプランター、沿道からも楽しめるベランダの緑、身近な水と緑は、小さなものでもまちに潤いを与える貴重な景観要素です。

このような水と緑の景観を守り、より魅力ある空間として育てることで、区民の心のよりどころとなる景観まちづくりを進めます。

### ●視点-2 水と緑に親しむ

本区は、水辺の都市として発展してきました。かつて水は、水運や用水路として生活に「欠かせないもの」でしたが、台風や高潮などの水害被害も多発し、「怖いもの」でもありました。

現在では、安全・安心なまちをつくる様々な取り組みにより、水を「親しむもの」として捉えた整備が進み、堤防や親水公園などの健康の道では多くの人々がジョギングやウォーキングを楽しみ、河川敷では野球やサッカーなどのレクリエーション、花火大会やレガッタなどのイベントを楽しむなど、水と緑を身近に感じられる機会がたくさん生まれています。

このような歴史をふまえ、より多くの区民が水と緑に親しむことができるようにすることで、自分のまちへの愛着をさらに高めることができます。

### ●視点-3 水と緑のネットワークをつくる

荒川や江戸川などの大河川、旧中川や新川の親水河川、古川親水公園や一之江境川親水公園などの親水公園と親水緑道、かつての用水路を活かした緑道、健康の道など、多様な親水ネットワークが形成されています。

これらの既存のネットワークを活かしながら、区内に点在する小岩菖蒲園や小松川千本桜などの花の名所や大規模公園などの拠点をつなぐことで、水と緑のネットワークを拡充します。

## 2. これまで創り育てたまちの宝物を大切にしよう

-歴史・文化的資源を保全・活用し、周辺地域が一体となった修景を進める-



古代、海の底にあった本区は、約 3000 年前から地盤の隆起や土砂の堆積などにより、次第に陸地ができはじめ、約 1800 年前の弥生時代後期に小岩あたりで人が住み始めたと言われていました。

その後、農業や漁業を基盤にまちが発展し、江戸時代には、宇喜田新田、伊豫(いよ)新田、一之江新田などの新田開発が盛んに行われました。元佐倉街道や行徳道、岩槻道などは旅をする人でにぎわい、江戸川や新川は荷物や旅客を乗せて往来する舟でにぎわっていました。春江にたたずむ一之江名主屋敷はこのような農村の風景を今に残す、貴重な財産となっています。

江戸時代には米作りが盛んでしたが、明治時代にはいと蓮根、野菜や花卉、葛西浦では海苔や貝の養殖、小岩では和傘の生産など、多様な産業が生まれました。

さらに総武線の開通とともに人口が増え始め、江戸川区が誕生した昭和 7 年には、人口が 10 万人となっていました。

その後、関東大震災や戦争による大空襲などによる被害などがありましたが、昭和 30 年代からの日本経済の高度経済成長にともない、地下鉄東西線の開通などで区の人口も急増し、昭和 40 年代には急激な都市化による環境悪化が深刻な問題となりました。そしてそれを改善するための区画整理事業や公園整備などにより、現在のまちが形成されました。

このような本区の歴史や文化を象徴する、地域のランドマークやシンボルとして重要な意味を持つ史跡や寺社、陸運や水運として機能してきた旧道や水路、水閘門、農の風景や歴史的建造物、区内各所に点在している石碑や大木など、重要な要素を大切にします。



### ●視点-1 まちの歴史を知る

まちの歴史や文化は、先人達が築きあげてきた宝物です。私たちはこれらの宝物を引き継ぎ、発展させながら、次世代の人々につないでいく必要があります。そのため、自分たちのまちの歴史や文化を知ることから景観まちづくりを進めます。

### ●視点-2 土地の記憶を活かす

土地の記憶は、有形の資源だけでなく、地名や伝説、風習、産業など、目に見えにくいものや、既に失われてしまったものなど多々あります。

小学校や交差点などで使われている「鎌田」「今井」「長島」などの名称は、現在の住所表記にはありませんが、鎌倉・室町時代より残っている歴史ある地名です。

区内に縦横無尽に流れていた用水路や、元佐倉街道や今井街道、五分一通りなどの旧道は、その水路や道のデザインや、その周辺のまちなみはすっかり変わってしまいましたが、今なお農の暮らしを営んでいた人々と同じ川筋や道筋をたどることができる貴重な資源です。

本区には様々な伝統的な行催事があります。中には氏子の減少により祭が縮小されたものもありますが、浅間神社ののぼり祭りのように地域の人々の手で再び活気を取り戻し、今なお、五穀豊穡を願った先人達の熱い想いを感じさせてくれるものもあります。

米や蓮根、海苔の生産など、かつて本区の経済を支えていた産業の風景も失われてしまいました。しかし、子どもたちの体験学習による海苔づくりや米づくり、伝統漁法を復活させた投網まつりなども開催されています。

このような土地の記憶を大切にし、かつての歴史や文化をそのまま伝えるだけでなく、現在の暮らしの中で活かすことで、生き生きとした景観としてまちの個性がより引き立ちます。

### ●視点-3 歴史・文化資源を保全する

文化財や古くからある寺社などは、地域の歴史を物語る重要な要素です。一之江名主屋敷は江戸中期における名主としての風格を備え、屋敷と周辺の景観を併せ持った史跡として貴重なものです。多くの歌舞伎役者の墓のある大雲寺、鹿骨地名の伝説の地である鹿見塚、伝統的な軟弱地盤対策として行われるそろばん地業の遺構がある昇覚寺の鐘楼、都区内にある46基ほどのうち10基あまりが本区内に残っている富士塚など、本区には様々な文化財があります。

このような文化財に指定されていないものにも、まちかどの大木など、まちの歴史を伝える数多くの資源があります。

また、旧小松川閘門や江戸川水門・閘門など、水と共に発展してきた本区の歴史や文化を今に伝える財産です。

当時の人々の暮らしや想いをイメージしながら、現存する歴史・文化資源を保全し、資源の持つ雰囲気を景観まちづくりに活かしていきます。





### 3. 住み良く心地よいまちなみを育てよう

—江戸川らしさを感じる地域資源を活かし、個性あるまちなみをつくる—

日々の暮らしの中で毎日使っている道、駅、家の周り、商店街など、いつも見慣れた風景は、人々の心の原風景となります。その見慣れた風景が美しく、楽しく、心地よいものであることは、毎日の快適な暮らしに大切なものです。

ゴミがなく清潔感のあるまちなみや、開放的でゆとりと安心感のあるまちなみ、地域コミュニティがあり親しみを感じるまちなみなど、住み良さは、まちなみの景観に表れてきます。

本区の大半は住宅地が主体のまちなみとなっていますが、農が集積するまちなみ、寺社が集積するまちなみ、大規模団地のまちなみ、路地の多いまちなみなど様々です。それらまちの特色は、道路や鉄道整備などのまちの成り立ち、周辺環境、土地利用などから形成されています。

平井や小岩、松島付近では、戦後の経済復興に伴う都市化の波を受けて、本区でも早くから市街地化が進み、歴史ある商店街や密集市街地などが多く分布する地域です。また、中央地域などでは、町工場なども多く残っています。

鹿骨や篠崎、瑞江付近は、東京都による田園の性格を活かす緑地計画の思想から、市街化は遅い段階から始まった地域で、今も農地が多く残り、比較的ゆとりのあるまちなみが形成されています。

葛西では葛西沖埋立事業や土地区画整理事業により、新しいまちに生まれ変わり、中高層建物を主体としたまちなみが形成されています。

これらの特色をふまえながら、江戸川らしさを感じる地域資源を活かし、個性豊かなまちなみをつくるとともに、多くの人が利用する道路や鉄道から見える、連続した景観形成を図ります。



### ●視点-1 江戸川らしさを引き出すまちなみをつくる

まちの特色をふまえて、それぞれの地域ごとの「江戸川らしさ」を引き出すまちなみを育てていきます。

#### ・住宅地のまちなみ

住宅地にも様々なまちなみがあります。ゆとりを感じる低層住宅地や、農の集積地、寺社の集積地、路地の多いまちなみがあります。また、低層と中高層が調和する住宅地や、中高層が主体の住宅地、大規模団地などもあります。これらの住宅地が主体となったまちなみでは、そこで生き生きと暮らす人の姿を活かした景観まちづくりを進めます。

#### ・工業地のまちなみ

本区には中小工場の集積地や、工場・研究施設等の集積地があります。中小工場の集積地は、都市の中でもものづくりを間近に体験できる、貴重な機会や環境となっています。しかし住宅地と隣接・混在するため、生産環境と居住環境との調和が必要となります。また、工場等の集積地では、沿道部や建物の緑化等により、周辺の住宅地と調和するまちなみに配慮した景観まちづくりを進めます。

#### ・商業地のまちなみ

商業地は、多くの人が集まり、にぎわう地域の顔となる場であり、風格やにぎわいをもたらし、江戸川らしさがより引き立つまちなみを育てます。

### ●視点-2 シンボルとなる資源を保全・活用する

江戸川らしさのある景観まちづくりを進めるために、その景観の主となる要素である地域資源を保全・活用します。暮らしの中で親しまれている大木や寺社、地域の拠点となっている区役所やタワーホール船堀、区民事務所などの利用頻度の高い文化・教育施設等の公共建築物、橋梁・水閘門を活用するとともに、今後つくられる新たなまちのシンボルとなる資源を活かした景観まちづくりを進めます。

### ●視点-3 気になる景観を改善する

まちを見渡すと、雑然とした景観や改善したい景観など、気になる景観がみられます。それはまちの特性毎に異なり、落ち着きある住宅地では景観阻害要因となる屋外広告物も、商業地ではにぎわいを演出する要素の一つです。自然の眺望景観に調和しない色彩の建物も、周辺のまちなみへの配慮の工夫によっては地域のシンボルになる要素となります。

また、ゴミの出し方や乱雑な自転車の置き方など、日常生活の中にも気になる景観は潜んでいます。

それぞれのまちの江戸川らしさをふまえて気になる景観を改善し、快適な景観まちづくりを進めます。



#### 4. 生き生きとしたまちの表情をつくろう

—区民や地域産業の持つパワーを活かし、江戸川らしさを顕在化する—

まちの景観の中には、そこに住む区民の暮らしの姿が欠かせません。本区は東京のベッドタウンとして発展し、人口は67万人で今なお増加しています。都区部の平均に比べて若い世代が多く、子どもの数が多いことに特徴があり、活力ある区民の暮らしを支える機会や産業が景観の重要な要素となります。

本区では、季節毎に様々なイベントや催しを開催しており、春のさくらまつり、緑のフェスティバル、小岩菖蒲園まつり、夏の小岩あさがお市、金魚まつりや花火大会、秋の江戸川区民まつりや影向菊花大会、冬の正月用花の展示即売会など、年間を通じて皆で楽しみ、交流する機会があります。特に秋の江戸川区民まつりは、30年以上も続く歴史をもち、55万人もの来場者のある区内最大のイベントとして発展してきました。

また、江戸川らしさのある産業として、まず小松菜と花卉に代表される農業があげられます。東京都農林総合研究センター江戸川分場のある鹿骨地域や篠崎地域を中心に農地が多く分布し、今も懐かしさを感じる風景を形成しています。農地は減少傾向にありますが、区民の農体験に対する意識が高まり、区民農園やふれあい農園など、農家だけでなく区民の協働により農を活性化する取り組みが行われています。

その他にも、東京都淡水魚用水漁業共同組合の生産量・販売量の約3割を占めている金魚養殖や、江戸川や旧江戸川沿いに多く分布する舟宿、旧江戸川沿いにある造船所、えどがわ伝統工芸産学プロジェクトなど新たなブランド化の取り組みが始まっている伝統工芸など、様々な江戸川らしい産業が残っており、失われつつある生産活動を体験できる貴重な機会を提供してくれます。

笑顔あふれる暮らしや、地域が潤う産業がある元気なまちは、江戸川らしさのあるにぎわいの景観が形成されます。これらの区民や産業のもつパワーを活かして江戸川らしさを顕在化し、生き生きとしたまちの表情をつくります。



●視点-1 元気な子どもの姿を活かす

本区は他区に比べて子どもの比率が高く、親水公園でザリガニを釣ったりトンボを追いかけたり、身近な公園で遊具やボールなどで遊ぶ子どもたちの元気な姿が、区内の各所で見るすることができます。また、明るい日差しの中で元気に遊ぶ子どもたちの声や姿は、周りを元気づけてくれます。

子どもたちの元気な笑顔がいつもまちにあふれるよう、通学路や公園など子どもたちが安心して安全に遊べる環境を整えます。

●視点-2 人が楽しみ、交流する景観をつくる

毎年同じように行われるイベントも、毎日使う道や公園も、歳とともにその楽しみ方、感じ方は違ったものになります。その味わいの積み重ねが、一人ひとりのまちへの思いを豊かなものにしていくに違いありません。

日常のまちなみの中に多世代の人々が憩える木陰のポケットパークや道沿いのベンチを配置するなど、多くの人々が利用する商店街や沿道などでは、人々が楽しみ、交流する景観を育てます。

また、駅前などのまちの顔となる場では、煩雑になりがちな建物や屋外広告物の配置や規模、色彩などを工夫し、にぎわいの景観づくりを進めます。

●視点-3 地域産業を景観に活かす

本区には、小松菜や花卉を代表とする農業や金魚養殖、屋形船、造船所など、江戸川らしきのある様々な地域産業が点在していますが、減少傾向にあり、まちから地域産業のある風景が失われつつあります。

このような産業を地域の財産として意識し、景観まちづくりに活かしていきます。

## 5. 区民の想いを活かし協力して進めよう

### －区民主体の活動を活性化し、ボトムアップの景観まちづくりを進める－



本区では、昭和30年代後半からの急激な都市化の波により、公害、交通災害、ゴミ問題、緑の消失など多くの問題が発生しました。昭和40年代には、環境浄化対策が重要な課題でした。

このような環境問題を解決するため、昭和45年「環境浄化運動」が始まりました。清掃デーをはじめとするまちの美化、浄化運動、緑化運動を中心に、区民とともに手を携えながら環境を守ってきました。そして、都市環境が整備される中、環境を守る視点から、真に快適な環境と、人と自然が共生するまちを目指した運動として、昭和59年「環境をよくする運動」に名称を改め、今日までこの運動を継続しています。この運動の母体組織である「環境を良くする地区協議会」は、町会自治会、子ども会、くすのきクラブなどから推薦された推進委員を中心に、連帯感や地域を愛すること、育てることを目的に活動を続けています。

これらの地域組織を主体とした活動だけでなく、公園ボランティア、水辺のボランティア、緑のボランティアやまちかどボランティアなど、アダプト活動が活発で、公園や水辺、道路などで清掃活動や花壇づくり、桜の保全など、様々な取り組みが行われています。平成15年には、「環境にやさしいまち江戸川区」を目指してNPO法人えどがわエコセンターが設立され、環境学習やもったいない運動えどがわなど、区民が主体となって、環境に関するプログラムを提供しています。

このように、これまで区民と区が、強い信頼関係による協働のまちづくりを進めてきた長い歴史があります。

よりよい景観は、身のまわりの身近な景観をよりよくしていくことから始まります。まちづくりへの意識を「安全・安心」や「便利」に、「景観」というキーワードを加え、区民一人ひとりが、また、地域が日常生活の中で、「江戸川らしさ」のある景観を考えることが大切です。地域をより理解し、愛着を深めていけるよう、区民発意のボトムアップによる景観まちづくりを進めます。



### ●視点-1 地域力を活かす

景観まちづくりを進める上で、地域力が重要な原動力です。これまで町会・自治会を中心とする組織と区が連携しながら、本区らしいパートナーシップを築いてきました。また、アダプト活動のほか、陶芸やダンスなどの文化系サークル活動など、様々な分野の活動が盛んです。

それぞれの活動団体が、町会・自治会と連携することで、活動の輪が広がり地域力の強化につながります。

また、本区には建築や花卉園芸など各分野で活躍するプロが多くいます。これらのプロを活用し、より質の高い景観づくりを進めます。

### ●視点-2 身近な景観を改善する

景観まちづくりは、区民一人ひとりの身の回りの景観を整えることから始まります。公共性を意識した日常生活の中で景観に対する配慮が、本区全体の景観まちづくりの基盤となります。

本区では、環境を良くする運動などを始め、様々なボランティア団体がまちの中で積極的に活動しています。しかし場所によっては、タバコの吸い殻やガム、塀や壁の落書きなどを見かけることがあります。このような身近な場所での小さな配慮の欠如がまちの景観を阻害しています。

日常生活の中で、区民一人ひとりが周囲の景観に配慮した行動を心がけることによって景観まちづくりの活動の輪を広げ、身近な景観を改善していきます。

### ●視点-3 子どもたちとともに景観への意識を高める

自分のまちの江戸川らしさを発見・再確認することから景観まちづくりが始まります。景観まちづくりを通じて、誇りと愛着を持つことのできるまちを育て、次の世代へと伝えていくために、子どもの頃から「景観」に対する関心を持つことが必要です。

そこで、環境学習などを通じて、子どもたちの景観への意識の向上に努めます。

